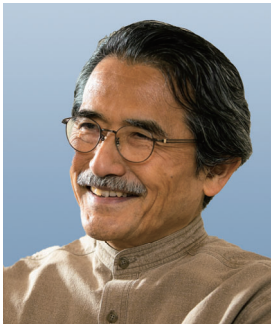
巻頭言
No.174

天然自然の美ということ

作家・国文学者
林　望



イギリスは美しい国だ……と、思う。私はイギリスの風光を愛すること人後に落ちないつもりであるが、それよりも、じつは、もっと祖国日本の風光を深く愛する。

そもそも、イギリスをぐいっと日本のほうへ引きずって来たとすると、樺太くらいの緯度にあたる。北海道よりずっと北にある国なのだ。けれども、冬は何メートルもの雪に閉じこめられるなんてことはない。それは暖流メキシコ湾流が、イギリスを暖めるせいらしく、寒暖の様相で言えば、日本とそれほど極端な違いはない。

ただし、緯度が高くなってくると、それは標高の高さと同じように、次第に森林の樹木相が限られてきて、やがて森林限界となる。かつて、生物学者であった私の従姉妹に聞いたところでは、同じ面積あたりの植物の種類を細大漏らさずカウントすると、日本とイギリスでは、まったく桁外れに日本のほうが種類が豊かなのだそうである。すなわち、イギリスの山野は森林限界に近く、そこここにMoorと呼ばれる原野が広がっている。北にはYork moor、西にはDart moorなど、その荒涼たる風光は日本には見られないところで、大きな木は殆ど無く、総じてガレや泥炭地の山野に、夏はHEATHERというごく丈の低い潅木が地を蔽って赤紫色に咲き続き、あるいはGORSEというトゲトゲの木が可憐な黄色い花を咲かせている、というような、いわば荒涼美と評すべき景色であるが、植生としてはあくまでも貧相である。

そこで、かつての大英帝国の貴顕たちは、その広壮なる居館を飾るに、多く外来の植物を拉し来たって、百花繚乱の美しい庭を造作することに熱を上げた。そのために、プラント・ハンターと呼ばれる人たちが世界じゅうから夥しい植物の種や苗を齎して、それが今言うところのイングリッシュ・ガーデンとなって結実したのである。つまりは、これらの英国式庭園というのは、もともと貧相だったイギリスの山野に、人工的に豊かな植生を移植した模倣的自然だったのである。

翻って、亜熱帯から亜寒帯に及び、また海浜から森林限界をはるかに超える巍々たる高山帯までを擁する我が日本は、なにもせずとも驚くべき豊かな自然を持つ国であった。その豊かな自然の宝庫である日本の民が、わざわざイギリス式庭園の模倣などせずとも、むしろありのままの自然を心ゆくまで楽しみたい、と私は思う。とくに田や畑の風光、また新緑に紅葉に四季折々の錦繍を見せる里山の樹林、それは世界に冠たる美景である。今、その田畑が多く耕作放棄地となり、里山の木々は切られて太陽光発電板が並ぶ、なんと悲しい光景であろうか。わが国の歴史でもある田畑や里山を、もう一度見直してみる、それが今非常に大切なことではないか……。

林　望（はやし のぞむ）
作家・国文学者
慶応義塾大学大学院博士課程満期退学。専門日本古典文学・書誌学。ケンブリッジ大学客員教授、東京芸術大学助教授等を歴任。『イギリスはおいしい』で日本エッセイストクラブ賞、『ケンブリッジ大学所蔵和漢古書総合目録』で国際交流奨励賞、『謹訳源氏物語』で毎日出版文化賞特別賞等受賞。イギリス文化論エッセイのほか、英詩の訳詩集『新海潮音』などでも知られる。古典論、随筆、小説等著書多数。